Mark Twain の「自伝」

——ナルシシズムとの闘い——

森田　孟

汎愛も一人への愛から始まるものであろう。博愛主義は個人主義に根差すに違いない。一人すら，個さえ，愛せずに，広く多くを愛することは出来ない筈である。また，汎愛に繋がらず，博愛に到らないような一人への愛，個人愛もないだろう。そのようなものは，真の愛ではない。利己主義が不可とされる所以である。

真の愛に値する個人愛，一人への愛は，やはり，己れ自身への愛，自己愛に始まるであろう。自分自身すら愛せずに，他人を愛せる筈はなかろう。他人に真の愛を注げる人は，恐らくは無意識のうちに，己れ自身を真に愛している人なのである。自己愛の場合にも，「真の」と限定しなければならないのは，さもないものは「ナルシシズム」であり，これは，自己「愛」ではなく，自己「惑溺」だからである。「惑溺」は排他性のものであり，従って「博」「汎」にはなり得ず，「愛」ではない。

ここで言う「真の」とは「純粋な」ということで，真の愛，とは，純粋な愛情のことであり，愛のための愛，愛以外の如何なる理由でもない愛，のことである。本来の「愛」に，「真の」などという限定詞は不要な筈であり，「真の愛」をただ「愛」と呼ぶべきものだろうが，「愛」という言葉は残念ながら，本来の愛を指すには一々「真の」なる限定詞を必要とする程，一般に幅広く使われており汚れているようである。

自己惑溺でなく，ナルシシズムでない真の自己愛は，全ての真の愛の源泉であり基本であり根幹であり，人間が「人間として」生きてゆくには不可欠のものとさえ言ってもよいだろう。そして，自叙伝なるものを物する精神も，所詮は，自己への愛，に尽きるのではなかろうか。自叙伝が秀れたものになるか否かは，その自己愛が「真の」であるか否かに拠るだろうが，これは些か，先走

ってしまったようだ。

こちたき議論めいたものから始めたのは，他でもない，この自叙伝なるものを，特に，マーク・トゥエイン（Mark Twain，本名 Samuel Langhorne Clemens，1835-1910）の「自伝」を，考察するのが，本稿の主題だからであった。

*

「自(叙)伝」(Autobiography)とは，と『大英百科辞典』(*The Encyclopaedia Britannica*) は言う，サウジー（Southey）の示唆に富んだ術語が示すように，自分自身で自分のことを書いた一人の人間の伝記（the biography of a person written by himself）である，と。甚だ分り切った定義のようで，示唆に富んだ（suggestive）は恐れ入るが，確かにその通りである。書かれる動機は種々様々であるとしながら，この同じ『ブリタニカ』が挙げるのは①自己教化のための自己検証（Self-scrutiny for self-edification），(2)自己正当化(Self-justification)，その例は，ニューマン枢機卿（John Henry Newman，1801-90）の『我が生涯の弁』*Apologia pro Vita Sua*（1864），(3)魅惑的な記憶をあれこれ思い起こしたいという懐旧の情による欲求，その一例は，セルマ・ラーゲルレーヴ（Selma Lagerlöf，1858-1940）の回想録『モールバッカ』*Marbäcka*（1922），(4)自分の経験が他人に役立つかも知れないという信念，その一例は，ヘレン・ケラー（Helen Keller，1880-1968）の『我が生涯の物語』*The Story of My Life*（1902），(5)混頓たる世界の中で自己を方向付けたいという誠実な試み，その一例は，ヘンリー・アダムズ（Henry Adams，1838-1918）の『ヘンリー・アダムズの教育』*The Education of Henry Adams*（1907），(6)芸術的な表現を行いたいという衝動，(7)名声や地位を利用したいという全く商業上の欲望，などである。

ハーパー社の『文学の手引』[(1)]は，もう少し，さすがに詳しい。それに依れば「自伝」は，「ある生涯，もしくはその一部について，それを実際に生きた人が書いた叙述」で，「他人が書いたある生涯」を表わす「伝記」Biography と対比をなすものである。普通，自伝は，公に読まれるつもりのものであり，「日記」Diary「日誌」Journal「書翰」Letters などに見い出される或る生活についての私的な説明とは違う。「回想録」Memoirs は，自伝の一形式であるが，通常は範囲が限られていて，公の出来事の個人的な面に思いを巡らすものである。最初の秀れた自伝としては，聖アウグスティヌス（St. Augustine,

354-430）の『告白』*Confessions* が挙げられる。若い頃の堕落，精神の教化，キリスト教の信奉などを詳述しながら，アウグスティヌスは，特に若い頃の「外的な事実と内面の成長との相互作用をしばしば呈示」して，それらが生じた諸条件を説明ないし正当化しようと試みており，彼はこの著作によって後の自伝作者たちのために一つの範型を確立した。作者には，外的な事実が最も重要な人々もおり，こういう著者は，一過性の歴史の要因や束の間の社会条件を永遠に記録に留めるわけであり，また，自己省察が最も肝要だと思う作者たちもいる。ベンベヌート・チェリーニ（Benvenuto Cellini, 1500-1571）の『自伝』は，イタリア・ルネッサンスの彫刻家の感情の嵐に騒き乱された生涯を報告してくれるし，ベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin, 1706-1790）の『自伝』は，18世紀の最も偉大な公人の一人の個性に光を投げかける。『ブリタニカ』が，自己の方向付けを動機とする自伝の例として挙げていた『ヘンリー・アダムズの教育』では，歴史家のアダムズが，自分の生まれた時代の物質面・精神面の変化に人間がどう関わり合ったかを省察している，と以上はこの『文学の手引』の解説である。

NED (*The New English Dictionary*) は，自伝（Autobiography）を，自分自身の歴史について書いたもの（The writing of one's own history），自分自身で書いた当人の生涯の物語（the story of one's life written by himself）と定義する。「伝記」などという語を用いないところが，さすがに語義の説明として秀れているが，「自伝」という語は新しい言葉である。湖畔詩人（Lake Poets）の一人で桂冠詩人のサウジー（Robert Southey, 1774-1843）が1809年に，「この非常に面白く特異な自伝の見本」"This very amusing and unique specimen of autobiography" と使ったのが最初というから，何と19世紀に入ってから出来た単語なのである。先刻，当り前すぎて，示唆に富むなどとは恐れ入るなどと憎まれ口を叩いたが，それは今だから言えること，"Autobiography" はサウジーの造語（それ以前の用例が見つからない限り少なくとも今までのところは）ということになり，彼の命名・定義は，「示唆に富んで」いたのである。

因に「伝記」"Biography" の方も――無論，「自伝」よりも先きに現われている語であるが――比較的新しい単語で，語形から見たところ文字通りの "writing of lives" の意味であり，"biographia" とか "biographus" の形で近代語では英語よりも早く出現しているが，英語で "biography" が初めて使われるのは，1683年の John Dryden（1631-1700）の用例だというから，「自伝」

よりは126年早い。尚，“biographer” は Joseph Addison (1672-1719) の使った1715年が初出であり，“biographist” は，1662年，“biographical” は1738年に初めて現われる語だという。「自伝」と対比される意味での「伝記」の定義は，*NED* では「文学の一部門としての，個人の生涯の歴史」“The history of the lives of individual men, as a branch of literature” である。

*

マーク・トゥエインの自伝には，現在，次の，それぞれ異なった三種類が存在する。(2)

① *Mark Twain's Autobiography*. Ed. Albert Bigelow Paine. 2 vols. New York : Harper & Brothers, 1924. 以下，P版と略記する。

② *Mark Twain in Eruption : Hitherto Unpublished Pages about Men and Events*. Ed. Bernard DeVoto. New York : Harper & Brothers, 1940. 以下，D版と略記する。

③ *The Autobiography of Mark Twain, Including Chapters Now Published for the First Time*. Ed. Charles Neider. New York : Harper & Brothers, 1959. 以下，N版と略記する。

マーク・トゥエインの「自伝」が問題になるのは，まずこの点である。それは，彼が，自伝の大半を，口述筆記して残し，公刊を自分の死後の他人に託したからである。

トゥエインは30代半ばという早い時期に，自伝を書く意図を抱き始める。ナイダーがN版の序文で整理するところを追ってみよう。

1870年に自伝の断片を書く。

1873年頃，短い粗描を書いて，友人のウォーナー(Charles Dudley Warner)に送った。

1877年，ミズリー州フロリダ時代の，幼少年期のことを回想して書く。

1885年，グラント将軍 (General Grant) の死に際し，同将軍に会った思い出を口述した。

1897—98年，ウィーンに滞在中，叔父の農場で過した幼い頃について素晴しい数章を書いた。

1899年，甥のサミュエル (Samuel Moffett) が使うようにと，粗描を書く。これに基づいてサミュエルが，1899年に出版されたマーク・トゥエイン作品集のユニフォーム版に，トゥエインの伝記の小論を書いた。

1904年，フローレンス郊外に滞在中に，Villa Quarts と John Hay の思い出について覚え書を書いた。

1906年，「自伝」の材料となる大量の口述を始める。

「自伝」執筆の作業はトゥエインを，楽しませたりうんざりさせたりした。1877年に42歳の時，彼は普通のやり方で「自伝」執筆を本格的に始めようと決心する。1904年に彼は書く，「確かに始めはした」と。しかしその決心は次第に解けてゆき，一週間で消え失せたので，始めたものは放棄した。それ以来，3，4年毎に同じように開始してはいずれも放棄した。一度は，日記をつけるという実験もやってみた。積み重なれば十分な材料になって，自伝へと膨らませられようと思ったからだが，この実験も一週間しか続かなかった。一日の記録をつけるのに，毎晩，夜の時間の半分もかかったが，一週間後，その結果が気に入らなかったのだ。この8，9年，何らかの方法で自伝を物しようと何度か試みたが，その結果にはいつも不満だった。文学的すぎたのだ，と。更に彼は言う。

手にペンを持つと，語りの流れが水路になって，ゆっくり滑らかに端正に，眠たげに動いてゆく。欠点だらけという以外には欠点がなくなってしまう。余りにも文学的できちんとしすぎ，こぎれいになりすぎる。歩きぶり，姿，動きが，語りに適さないのだ。そういう水路の流れは，常に反映風になってゆく。それがその本性だからどうしようもないのだ。その滑らかな輝く表面（slick shiny surface）は，両岸の中を流れてゆくが，やりすごしてゆく全てに，牛，木の葉，花々，その他一際に，興味を抱く。そして，反省し反映することで多くの時間を無駄にするのだ，と。

後に彼は，新聞の切り抜きを，自伝に散りばめようという実験もやってみる。書き写すのでなくて切り抜きなら，古くなると面白味が出てくるかと思ってである。結局，彼は，この自伝では好きな時にいつでも横道へさまよって，またその気になった時に戻って来ようと思う。そして遂に，1904年にフローレンスで，自伝を物する適切な方法に思い致ったと感ずる。生涯のどこからでも始めて，好き勝手に生涯のどの時期でもさまようことにする。その時に興味を抱いたことだけを語ることにし，その関心が薄れそうになったらすぐその話題をやめて，新たに心に浮かんできたもっと興味を覚えることに移ろう，というものである。ペインがP版に付した序文で述べることも加味すると，トゥエインは，日記兼自伝にしようとも考える。現在の生ま生ましい出来事と，過去の出来事のような記憶とを対比させれば，この対比ということでそれぞれの魅力

が発揮されようから，日記兼自伝を興味深いものにするには何の才能も必要ではない。そういうわけで私は適切な方法を見い出したのだ。これで私の仕事は，ただ楽しみのみ，遊び，気晴し，全く何の骨折りもなしに，出来ることだろう，とトゥエインは思った。

ところが，1906年までには，困難に気付く。自分に起こった一連の出来事を描こうと思っても無理で，その時何か意味があると思えたことと，ほんの2，3ヵ月前に起こったことを語るしかない。覚え書を60万語まで大きくしようと思ったが，時間がかかりすぎると。しかし別の時にはまた，自分の所業に誇りを感じて，これは将来の全ての自伝の模範になるのではないか，などと思う。自分の発見したと思う形式と方法のせいで，過去と現在が絶えず面と向き合って，火打石と鋼鉄とを打ち合わせた時のように，興味の火花を新たに発せられて対照になっている，という形式と方法によって。そして，平凡な通常の人間の生涯，ありふれた経験，そういう，けばけばしく目立ったりしない事柄を扱おうと考える。有名人との出合いなどではなく，平凡な人々との接触の方が多いのだし，自らにも読者にもその方が興味深いのだから。そして，トゥエインは言う。これまでの全ての伝記は，開いた窓（an open window）であって，他所行き着を着た著名な人々との出逢いなどについて書いてあるが，私の書く「自伝」は，鏡（a mirror）だ。私はいつも，その中に映っている自分自身を見ているわけで，従って私は背後を通り過ぎてゆく人々に気付くのである。その鏡の中の人々の姿を私は捉えるのだ。そして，そういう彼らが私に関して言うことを「自伝」の中に書き留めるのだ。貴顕の人々もやって来ようが，そういう人々は灯台や祈念碑として効果が挙がるように使いはするが，本当に役立つのは並みの人々なのだ，と。

トゥエインが，30数年間心にかけて何度も試みながらも，自伝を書き続けられない理由を，あれこれ譬喩を用いて考察し自らを鼓舞するのが，如何にも彼らしくて興味深い。自伝というものの性格が自ずから語り出されている観がするし，自分自身について語ることが如何に容易でないかということの美事な証明になっているというべきだろう。

自分のことは自分が一番よく知っている筈であり，最もよく判るに相違ない。それは確かな事実であるが，同時にまた，灯台下暗しであり，自分のことは自分では判り難く見え難い，というのも確かな事実である。最もよく知悉していながら，一番よく判らない自分という存在を捉えるにはどうすればよいか。「開いた窓」ではなく，「鏡」にしなければ，自分で書く自分の伝記は成

立しないのだという認識は，さすがであった。余りにも近すぎ，直接的にすぎるものは，却って捉え難いものである。物を見るにも捉えるにも，ある適切な距離が要る。直接すぎるものは一旦間接にすることが必要なのである。

トゥエインが一貫した自伝を書けなかったのは，「ある恐れ」のせいだろうと信じたのは，バーナード・ドゥヴォトウである。ハンニバル，つまり，自分の少年時代を思い起した時，トゥエインは，なつかしい牧歌だけではなく，不安，暴力，超自然的な恐怖，そして結晶化されてはいなくても発展してゆく「恐れ」を，そこに見い出したからだ。『ハックルベリー・フィンの冒険』初め，彼の傑作の大半は，そういう，幻想に縛られた不安（Phantasy-bound anxiety）から流れ出ているので，そういう恐れを検討して理解しようという衝動が，トゥエインに自伝執筆の衝動を覚えさせたのだと思うが，この恐れは彼の中心部を占めていたので，そういう恐れには象徴的に，小説という形でしか近づけなかったのだ，とドゥヴォトウは見た。大変瞠目すべき見解だと思われるが，ナイダーは，トゥエインが自伝を書きあぐんだ理由はこのような理由に依るまでもない，と一蹴する。

トゥエインの心には，余りにも追憶と懐旧の情が溢れていたので，通常の自伝のような，時代を追う書き方ができなかったのであり，また，トゥエインの場合は，物語作家が「事実」にうんざりさせられた好例である。「事実」とは幻想を禁ずる不純物だから，とナイダーは言う。トゥエインは，自分の書いた細部が正しいとは信じていないが非難は気にかけない。そういうものも事実と何ら変らず正当に働くのだから。この点でトゥエインには仲間がいる。小心で細かいことにもうるさかったヘンリー・アダムズでさえ，1850年に12歳の時経験した旅のことをこう述べている。これは記憶の中にある旅で，実際の旅とは全く違ったものだったかも知れないが，あの旅は私の教育のための旅だったのだから，教育に役立つのは実際の旅そのものではなく，記憶こそ重要なのだと。アダムズの主張を見逃がさなかったナイダーの指摘は美事である。自伝に意味があるのは，正に，記憶の重要さにあるだろう。

ナイダーは続ける。トゥエインの生涯は長くて豊かな人生であったから，それは彼にとって，尽きざる回想の鉱山だった。トゥエインは，人間のドラマを見る独自の方法であるアイロニーとユーモアと物語りの才能とで，無数の方向へと流れ出る連想を捉えたかったのだ。そういう仕事の途方もない大きさに，トゥエインはよろめいたのだが，本当に彼は失敗したのだろうか。事実は，偉大なものが確かに，彼の残した口述自伝の中に存在するということだ。もっと

長生き出来たら彼は自分で「自伝」を編集できただろうが，編集では些細なことを排除できても，偉大なものを編集で入れることはできない。

トゥエインは戦争に勝つことを犠牲にして戦術上の戦闘に勝ち続けたのだ。とナイダーは妙な譬喩を使って述べてゆく。芸術の皮肉の一つは，個々の戦闘には負けても戦争に勝つことは可能であり，戦争に負けるより個々の戦闘に負けることの方が悲劇的だということである。形が整っていて包括的でも，細部が死んでいる，ということだからだが，トゥエインの細部は強烈に生きているのだ。彼は自ら楽しみたかったのであり，それが口述の間の主な目的だった。トゥエインは，自分が愛している人々よりも長生きしたので，自分の流儀で追憶に耽りたかったのだ。こう，ナイダーは述べるが，ナイダーの言にもまた，しみじみ耳を傾けることが出来るだろう。

1906年の1月3日に，ニューヨーク市のある夕食会で，ペイン（Albert Bigelow Paine, 1861-1937）はマーク・トゥエインに初めて会って，トゥエイン宅を訪問したいと乞うた。アメリカ文学史上でも運命的な画期的な出逢いであった。この出逢いがなかったら，今日見られるようなマーク・トゥエインの自伝が世に出られたかどうか。次に会った時，正式の伝記を書きたいと申し出，トゥエインが承知した。その結果，口述筆記となり，ペインの書く伝記の素材にと，また，「適当な」時期に公刊されるべく，トゥエインが口述を開始する。1月9日から，トゥエインのニューヨークの家で始められ，ニューハンプシャー州ダブリンの近くでしばらく続けられ，再びニューヨークへ，コネティカット州のレディグへ，そして，トゥエインの最後の家となったストームフィールドへと，移動しながら，かなり連続的に2年間続けられ，それからとぎれとぎれにもう2年間行われ，そして，1910年4月21日のトゥエインの死で終ったものである。

口述の状態を，エマソンの調査[(3)]によって少し見てみよう。

1906年1月9日に始まった口述筆記は，この一ヵ月間に12回行われ，以降3年続く。この，1906年の一年間に，6月，7月は中断しながら，134回の口述が行われる。

1907年には，計70回（11月，12月には4回のみ）

1908年には，34回であるが，最後の口述が始められるのは1909年の初めであり，文字通りの最後の口述は，4月16日であった。口述筆記の総回数252回で，毎回平均，1,500語，日付けの分らぬものも含めて全部で，約450,000語，1906年以前に書かれたり口述されたりしたものは約60,000語で，巨大な，形のない

ものが素材として51万語残されたことになる。

初めのうちは，自分の死後少なくとも100年は出版すべからず，というのが，トゥエインのしばしば表明した命令であったが，口述開始後9ヵ月足らずで彼はこの考えを修正し，*North Atlantic Review* 誌に載せるために自ら数章選び出した。それらは，初めは隔週刊であったこの雑誌の1906年9月7日号から12月までと，その後月刊になった1907年1月から10月までに，計25回連載された。(4) それで得た3万ドルの原稿料を，トゥエインはレディングの家の購入に充当した。この雑誌の25回分は，1906年の冬と春の口述からのみである。その後トゥエインは，色々と議論しては，現存の人物やその直接の子孫を余り酷く扱っていない部分はどこでも，連載もしくは本の形で出版しようという気持ちを表明した。(Paine)

1909年，トゥエインは，口述伝記の一部であったものから取り出して「シェイクスピアは死んでいるか」"Is Shakespeare Dead?" を出版した。

1912年，ペインは三巻本のマーク・トゥエイン伝 *Mark Twain : A Biography*（現在は4巻本）を出版したが，その中に口述伝記を何ページかと，相当数の節を使った。

1922年，ペインは *Harper's Magazine* に更に何ページか発表した。

1924年，ペインは二巻本のマーク・トゥエインの自伝を公刊した。P版である。1906年以前の多くと，1906年4月11日までの口述の中からの抜粋で，252回の口述中71回分だけ使ったものである。これ以後のも出すつもりだったろうが，書評が余り芳しくなかったので，それ以後は準備しなかった。

1940年，ペインの死後，トゥエインの遺稿管理人となったドゥヴォトウが，ペインの使用しなかった口述伝記を編集して公刊した。D版である。政治家，特にセオドア・ルーズベルト Theodore Roosevelt についての議論などが入っており，P版が，トゥエインの生涯を強調しているのに対し，このD版は，一種の食卓雑談 Table Talk の趣きをもっており，伝記的というよりは主題的である。

1959年，D版以後19年経って，ナイダーがトゥエインの残した口述伝記の全部を見渡した上で，D版の，社会的政治的な批評の類は減じて，未刊の部分から約30,000語を取り込み，一般読者向きに，トゥエインの自伝の全体像を，79章に編集して公刊した。N版の出現であるが，この序文のナイダーの言をまた聞くことにしよう。

トゥエインが口述したものは，彼が初めの頃自分で書いた部分と同質のもの

は余りなかったが，それでも彼の人生を完全に説明するものとして貴重だし，また多くの場合秀れたものであったが，ペインは，『自伝』を出版する際，それが生まの素材であって，完成された状態ではないと考えたのが，彼にまずい選択をさせる結果になった。ペインの手元に残されたものは膨大で，適切な生彩に富んだものと，不適切で退屈なものとの混合体であった。部分や断片そのものは，主題上も文体上も事実の点でも完成されたものであったが，当惑させられるばかりの無秩序状態であった。ペインは，トゥエインの残した草稿をそのまま出版したら，己れの責任を弁えていないと責められただろうし，それを編集したりしたらもっと甚しく非難されただろう。そこでペインは決心したのだ。「礼節」propriety という点で自分が心を動かされた時はいつもその部分を削除する以外は，責任はトゥエインに委ねよう。そして，トゥエインに，配列は出来事の時間の順にしないで，書かれた口述された順にしてくれと要請されたことを実行した。しかし，とナイダーは異議を挾む。これは，トゥエインが，「伝記」を同時に全ての方向から物しようとしたのだということであり，ペインは，トゥエインが件の要請をした時の言葉や態度の詳細を述べていないし，書かれた部分か口述された部分かの別も，また，それが，二人の関係が始まった頃なのか終りの頃なのかも明示しないから，トゥエインの言葉が，どの位本気だったのかは判別できない。「この作品の種々の区分や章は作者の希いに基づいて，書かれた順に配列してあり，出来事を順に追っているものではない」とだけペインは記す。順序に関するトゥエインの希いをそれ程文字通り受け取るべきだったかどうか，と疑問視する。P版の欠点は，不完全，生のまま，配列の悪さなど明らかであり，何でもかでも入っている貯蔵庫である。トゥエインの考えと手法を正確に反映しているところが，P版の主な欠陥だ，というナイダーの評は，実はペインへの批判というよりは，トゥエインの「自伝」そのものの特色を指摘していることになるが，もう少しナイダーに語ってもらおう。

1879年という早い時期に手で書かれた断片から始まり，1906年4月の口述まで，雄大で滑稽な章をずっと重ねてくる。その大半には当惑するしかないし，一日の出来事についての断片的な意見，手紙の交換，時々の意見，とこんな風な編集では，秀れた部分も劣った箇処共々忘却されるだろう。トゥエインの読者・ファンは，これではトゥエインが自伝を書こうとしたのだなどとはとても思うまい。続編を出そうというペインの希望も運がつきて，娘ジーンの死についての部分で自伝を終らせてくれというトゥエインの要請も実現されなかっ

た。と，ナイダーはペインに過酷である。

ナイダーが挙げているP版への書評は，次のようなものである。

(1) もっと素直な言葉が期待できないだろうか。トゥエインは実際は非常に慎重な人だったので，本書に折々見られる他人への非難は手加減のない暴力だと彼には思えたのだろうか。こういう疑問は何らかの点で応えられるべきものだが，この編者のようにあっさり片づけるべきではない。本書は，無頓着で，反復が多く，無秩序だ。どこかにまだこれ以上のものがあるのではないか…。(*Saturday Review of Literature* のCarl Van Doren)

(2) 「これではマーク・トゥエインは，非常に滑稽な作家でもないし大した作家でもない」と攻撃し，「これらの散漫なつながりのないばらばらのページの退屈さ加減」について語った。(*Spectator* での Richard Aldington)

(3) 偉大な賢人の表現として本書を気に入ったが，「ここには人生の一貫した記録がない，精神のおもむくままに流れ出ている姦しい回想だけだ……どこからでも始まって全く終らない。骨格がないし，手足が巧妙に調整されていない。宇宙の中を進んでいって混頓に到る。繋りのない断片から成り立っている。これは偶然と，あわてふためきと気紛れと思いがけなさだ……」（マーク・トゥエインの友人 Brander Matthews)

(4) ナイダーが，最良の書評だと評する *The Nation* の Mark Van Doren は，本書はマーク・トゥエインの生涯についての「一貫した，もしくは，秩序立った，説明を期待する」人には失望を抱かせようと，あらかじめ注意してから言う。「誰にしろ，この人の心から，どれ位秩序を期待する権利があろうか。しかし，見られる限りの本書は，重要なものもそうでないものもという事柄の寄せ集めだ……未刊の文章と手近かにあった他のがらくたをすくい上げて，草稿を＜完全＞にしたのだ。各部は出来上った順に配列されていて，出来事の順にではない……しかしそれでもこの自伝は，偉大な書物と呼ばれねばならない。多分，正に本書の不完全さそのもののせいで，この本はマーク・トゥエインの文学の腱（sinew）を最も率直に剝き出しに露にしたのだ」。そして，マーク・トゥエインを，Fielding, Shakespeare, Rabelais と比較した後でこう締めくくった。「彼は上記の人々と共有しているのだ。第一級の作家には不可欠の，あの鉱山の膨大な豊富さ，雄弁という鉱山を。それがここに示されている。表現の最高の調子に到る無数の章句やページ，あるいは，読者を圧倒する賞め言葉や論難の言葉によってばかりか，更に，マーク・トゥエインの言語芸術に対する興味が限りないものであったという証拠が，到る処に見られること

によって一層説得力豊かに。」

行き届いた批評であった。このP版出現後16年経って，D版が公刊され，「自伝」のタイプ原稿の新しい部分が沢山，公衆の眼に触れることになる。P版をマーク・トゥエインの自伝としておくわけにはゆかぬとナイダーは言ったが，ドゥヴォトウも，無形式で煩わしいP版を気に入らなかった。自伝の内容を実例として「取り出す」ペインの技巧を評価せず，ドゥヴォトウは，「些末を削除し，一緒にすべきものを一緒に合わせた」し，選択し再編し編集することを躊躇しなかった。D版の組成は主題に依っているが，D版は先行者の版の補遺であり，それによって条件付けられているからペインの2巻本同様不完全である。D版の秩序（order）についてドゥヴォトウは言っている。「それはゆるやかなものではあるが，伝記に与えられる限りの緊密なものである。時には元の順序を生かした，一貫性を欠くという犠牲を少々犯しても」。しかし，ドゥヴォトウは誤っていた，とナイダーは言う。彼の言う主題の上の順序というのは押しつけられたもので，正確には，伝記に与えられる限りの緊密な順序などではなかった。その内的な順序の精髄は，時間なのだから。如何なる作品にしろ，最も緊密な順序とは，その作品の機能を果たす順序であり，その作品本来の順序，作品の主題と調和する順序である，とナイダーは言う。ドゥヴォトウは，タイプ原稿の未刊の部分についてのみ作業をし，それらを折々，削除した。彼は，「私にとって不適切とか興味がないと思われるものは除いた」と書いたが，序文では「幻想的で有害な」事柄がある故に除いたものもあると認めている。また，「誇張が余りにも幻想にまで到って，些末な怒りになっている故に」除いた部分のあることも付加している。で，ナイダーは，そういう章句を検討して，次のような結論に到る。賢明なやり方は，トゥエインにこういう感情の昂揚した事柄によって言いたいことを言わせることだ，と。

ドゥヴォトウが削除した部分には，生存中のトゥエインの娘と遺稿管理者の意見のような無視できない意見によって影響された箇所もあったろうが，ブレット・ハートに関する結論といってよいような観察を抑えたのは，疑問視してよい判断による。存命中の人々の感情を損ねたりせずに現在同様1940年当時も出版出来る重要な箇処はあったのだ。それらをドゥヴォトウは除いている。「私が重要だと思ったものは一際除かなかった。刊行したものには無論，除いた部分にも，私は責任を負う」と彼は書いているが，実際は自分が重要だと思ったものも除いているし，もし彼が編集者の役割として，他人の希いに譲歩しているならば，除去した部分に対する責任も全てが全て彼にあるわけではない。

こう述べながらナイダーは，以上のような点を別にすればD版は秀れたものだと認める。そして，その編集者の判断力と能力は明らかにペインに勝るとする。D版には明晰さと有機性があったし，*North Atlantic Review* に公刊されたものでP版に忘れられていた数章も再生させた。1940年までは学者たちにしか見ることの出来なかったマーク・トゥエインの新しい面を明らかにしてくれた。しかるべき評価をD版は受けたとして，その代表として *The New Yorker* の Clifton Fadiman の評を紹介している。「死後出版と言い置いてマーク・トゥエインが残した膨大な草稿の中から，あれこれとペインによって選ばれて出版された『自伝』は，およそ，第一級の作家の手になるものとしたら，がっかりするしかなかった。除去されていたものの中から，賢明な再生男 (Resurrection Man) B. ドゥヴォトウは，トゥエインの文学者像にとっては僅かでも，彼の分裂した気質を我々が理解するには非常に多くのものを付け加えてくれそうな本を創り出してくれた。全てが全て貴重な本で，それに読みやすいし，著者に投げかける新しい光という点でも不可欠な本だ。ドゥヴォトウの勤勉・趣味・対象に対する知識が一体となって，マーク・トゥエインが紛れもなく墓の中から語っている一巻の本を生みだしたのだ」。

ナイダー自身，このファディマンの評の最後の言葉が，一層よく当てはまるような『自伝』を，世に出したかったのであろう。P版もD版も，トゥエインの残した口述自伝の，ほぼ半分足らずずつで，その意味でもどちらも単独では全体像からほど遠い。ナイダーは，未刊公刊を問わず，自伝の内容を持つ素材全体を見わたして，種々の材料から選り分けをした。

(1) 一般読者を対象にし，彼らのある要求を充たせそうな手頃な一冊にする。

(2) 古びた退屈な些末な新聞雑誌調の部分をふるい落して，秀れた部分だけにする。

(3) 意見や二次的な回想よりも，もっと自伝らしいもの，もっと純粋に文学的な，如何にもマーク・トゥエインらしいユーモアのあるもの (Characteristically humourous material) に焦点を当てる。

以上，三点をめざして，高度に逸話風 (anecdotic) なものにナイダーは編集したが，トゥエインの精神の創造的な傾向を正しく表わしているという点で，逸話風は欠点ではなく長所だと信ずる，と自負している。そして，選出した箇処，除去した部分も，説明付きで示しているが，除去したものについては，こういうものは削除しても，マーク・トゥエインの文学者としての名声を損うこ

とにはなるまいと言う。選出については，自己の判断を停止して，やはりトゥエインの文学者としての名声を傷つけないで，彼の書いたものをなるべく多く出版という光の中に入れるのが自分の重要な役目だと考えたと言う。彼は，*North Atlantic Review* に連載されたものでP版から削除され，D版にも入っていないものを探し出したし，マーク・トゥエインの意志通りに，ジーンの死の部分を，この自伝の正当な位置，最終章に入れて，『自伝』の一部として初めて公刊した。何しろ，件の雑誌とP版に公刊されたものの章や部分は全部，もはや，その草稿やタイプ原稿は現存しないのだというのだから，このN版は貴重な労作であった。

ナイダーは，ドゥヴォトウとは違って，除去した部分の全てに対して責任など負わぬといい，その例に，1906年6月19日，20日，22日，23日，25日の，5日間の口述に触れている。この部分は，ドゥヴォトウも公刊を欲したが，存命中の娘クララ，当時は Mrs. Gabrilowitsch だった Mrs. Jacgues Samossoud の意向で，公刊できなかった。ナイダーの時も，彼女の許可が得られなかったが，彼は，公刊可能だとしても，自伝本体には入れず，その随想風の性格から付録にぜひ入れたかったと言っている。ドゥヴォトウのことを，当人の言明にもかかわらず，彼に全責任はないとナイダーが言った理由の一つであった。

この件，マーク・トゥエインがハウエルズ（William Dean Howells, 1837-1920）に宛てた手紙で有名だが，1906年6月17日付きの手紙ではこう書いた。(5)「明日，私は，西暦2006年以前に敢えて印刷されれば（そうならないと判断しているが），私の相続人とその譲り受け人たちは，生きながら焼かれることになりそうな一章を口述するつもりだ。私がもう3，4年長生きすれば，そういう章がもっと増えるだろう。2006年版が出版されれば物議を醸すだろう。私は，他の死んだ友人たちと共に注意しながら宙を舞っていることだろう。君は仲間だ」。そして，6月26日付きの手紙では，マーク・トゥエインはこの親友に，こう書いた。「この四日間，午前中，私はある恐ろしいことを口述した。私の死後100年間は，君以外の人の目には触れない。だが，私の心の底から述べたのである。ここ何年間も私の心に膿んできた考えで，重要なことだ。口述してやっとすっきりした。」

これは，神学上・哲学上の話柄で，新旧約両聖書に表わされている神の性格が矛盾していること，キリスト教の教義を擁護する議論が弱いこと，機械としての人間にはその行為に責任はないこと，などだと，書翰集の編者たちは注記している。1912年刊のペインのマーク・トゥエイン伝（vol. III. pp. 1354-57）

には，それらの章の見本が若干出されているが，ナイダーはこう述べている。

皮相な読み方をすれば，それらは野暮な不敬だと思われようが，それは深く宗教的な人の作品なのだ。それらは，正統，宗教上の実しやかなごまかしと見せかけ，に対する攻撃であり，マーク・トゥエインの心の大胆さと力を示すものである。彼は，他の事柄共々，神の性格，権威ある書物の諸欠点，不純な概念，聖書の邪悪な影響，現在の神と宗教は永続しないだろうという己が信念，キリストは自分が神だということを証明していないという自らの確信を，論じている，と。

この宗教関係の口述は，先刻も触れたように，クララが1963年まで公刊を許可しなかったが，彼女の死後，1963年 *Hudson Review* の秋の号に掲載された。それ程に大騒ぎをするようなものとはとても思えずマーク・トゥエインがひょっとすると，また大真面目で巫山戯ているのではあるまいか，などと思うとしたら，それは現代の我々の感覚と思考による錯覚なのだろう。時代と環境の相違・隔たりを痛感するのはこういうところである。

ナイダーに戻るが，彼はN版編集に当り，前任者たちが見落していた，トゥエイン自身による多くの修正も拾い上げ，また，圧迫によるのか忘れられたかしていた章句のページをすっぽり，それぞれ在るべき場所に戻して，それらを時間の順序に配列したが，厳密な時間順にはしなかった。そんなことをしたら，トゥエインの思考や文体の流れを余りにもしばしば妨げることになるだろうから。彼は，自らの語りの習慣に従って，時間を前後させることを好んだのだから。元のタイプ原稿には多くの要約の標題が付いていて，ペインは注意深くそれを公刊したが，ドゥヴォトウと共にナイダーも，それは退屈で煩わしいと考えて削除し，P版，D版には明瞭に印刷されていた書かれた日付は，ナイダーは重要性を余り認めずに，文脈上必要と考えるもののみ脚注にするだけで削除した。しかし，些か得意気？なこの処置は，エマソン[(6)]と共に私も不賛成である。口述に日付がないために，N版は，口述のどの箇処に当るかが突き止め難いので，研究者には不便である。口述された順に，というトゥエインの要請を真に受けすぎたとペインを責めた時，口述の時間の順序が不明故，口述者と聴き手との関係の深浅が判らないと難じたナイダーらしくないではないか。あくまでもやはり，これは，一般読者用の『自伝』だということであろう。そしてそういうものとしてこのN版は，誠によく出来ている。とにかく面白く読めるのだから。先刻見たように三点を目ざして逸話性の高度な『自伝』に仕上っているからである。だが，これもトゥエインの別の面は，それだけ抜け落ちて

いるとも言える。別のトゥエインらしさが。何の場合でもそうだが，利点は弱点でもある。ドゥヴォトウやナイダーが非難したペインの弱点は，しかし，生のマーク・トゥエインを混頓たる姿で，それだけ彼ら二人よりはよく表わしている利点にもなっているのだ。

N版では，わずかな場合に繋ぎの文章を，例えば "But to go back a bit"（しかし一寸戻ろう）などを挟んだり，新たな配列をしたために反復になるような文章を一つ削った他は，言葉は全てトゥエインのものだとある。それがどこだかは不明だが，因みにここで試みに，P版にある文章が二つ，N版にはないものを挙げておこう。N版の第18章，第2パラグラフから第3パラグラフへ移る箇処である（p. 88. ll. 2-3）。

The Clemens family was penniless again. (Orion came to the rescue.)——これは1906年3月28日の口述部分。

(But I am in error.) Orion did not come to Hannibal…——これは1906年3月29日の口述部分である。

この両者はP版では，第2巻の p. 275 にあるが，N版では（ ）の部分が削除されて二行になって続いている。（ ）部分がトゥエインの文章かペインの補ったものかは私には判らないが。

思えば，マーク・トゥエインも，ずい分罪作りなことをしてくれたものだ，いや，後人に仕事を与え鼓舞してくれる恩人というべきだろうか。彼の『自伝』のもっと完全な版を出版しようという計画は，その後も Mark Twain Estate の文学編集者 Frederick Anderson が進めていたが，1979年の彼の死によって中断した。現在の編集者 Dr. Robert Hirst によってなされるかも知れぬという。(7)

トゥエインの「自伝」の理論的根拠，根本原理は，彼の1907年2月21日付き書翰（J. W. Y. MacAllister 宛て）が最も美事に述べていると，エマソンは言う。(8)「口述したものというのは話であり，話というのは所々でよろけるから，それだけいいものになるし自然なのだ」。日常語で語るトゥエインの作中人物の話しぶりを髣髴とさせると指摘しながらエマソンは次のように言う。口述の多くは自然で気楽で気持がよく，形式張らず，中には毒舌三昧，焦点の定まらない自己中心，些末もある。構造や一貫性を期待させるという重荷を負っていないが，しかし，マーク・トゥエインは，真実ばかりを語っているのだという誤った認識で骨折ったのだ，と。そして，ハウエルズの手紙に言及しながら，マーク・トゥエインの語っていたのはせいぜいのところ「白っぽい褐色の

真実」だったのだ，と。

ハウエルズは，マーク・トゥエインに，君の『自伝』を猛烈に読みたいと言いながらこう書いていた（1904年2月14日付。MTHL. No. 607)。「君は自分自身について真実を語れるかも知れないと，私は思う。だが，すっかりだろうか。我々皆が心の中で自ずと知っている真黒な真実，心嚢の白っぽい褐色の真実，ワイシャツの素敵な白い真実？ 君といえど，黒い心の真実（the black heart's truth）は語れまい。そんなことの出来る人がいたら，太陽の輝いている最後の日まで名声を博せよ。」

確かに，マーク・トゥエインは，自伝はあらゆる書物の中でも最も真実なものだという立場で口述を始めたと書いている。自伝というものが，必然的に真実を消そうとするものだとしても，「著者という猫が，自分及び自分の臭いを公正な観客から隠そうとして土を掻き集めても，行間には，無慈悲な真実が確かに存在する」と（MTHL, No. 608. ハウエルズ宛て，1904年3月14日付)。「墓から語っている」"speaking from the grave" という有名な宣言も，＜真実＞のみを語っているという表明と受け取られかねないが，あれは飽くまでも願望なのである。そして同時に，＜真実＞のみが語られているわけはないだろうというこの著者の一流の皮肉な表明でなくて何だろう。「墓から語る」などと言えば，読者が一段と，中身の事実や真実に意識的になることを百も承知している作者なのである。マーク・トゥエインは，1909年か1910年に次のように言ったという O. Henry に同意したことだろう，とグリッペンは美事な洞察をしている。(9)「私はこれまで＜真実＞を語っている自伝・伝記・小説を読んだ覚えがない。勿論，ルソー，ゾラ，ジョージ・ムーアなどのものや，それぞれの胸中の窓ガラスだと思われているような回想録は色々読んだが，大抵それらは全て，嘘つき，役者，気取り屋だった。……真実を書いていると言う時困るのは，そういう書き手たちが，不道徳な作品を物そうとか，公衆に衝撃を与えようとか，編集者を喜ばせようとかしていることだ。この三つの全てに成功しているものも幾らかはあるが，決して＜真実＞を書いてはいないのだ」。

マーク・トゥエインと O. ヘンリーが，共に筆名であることも，単なる偶然ではあるまい。エマソンの言うような「誤った認識」だったのではなかろう。トゥエインは，「せいぜいのところ白っぽい褐色の真実」であることを認識していたのだ。彼の話の細部が，必ずしも「水晶のような正確な」(of crystal accuracy) ものではなかったことや，トゥエイン自身がそれを意識していたことは，ペインも証言しているし，(10) 内容の全てが全て絶対的な事実(gospel fact)

でないとはナイダーも注意を促している。そしてこの二人共，実に美事な言葉を残している。

「日付や出来事の明確な誤りを訂正するのは，読者を安心させるのに適しいことだが，その他の単なる細部の問題は，語ってゆく魅力を損ねないように保つこと程には重要ではない」（ペイン，P版序文）

「日記や手紙など近年の資料が，マーク・トゥエインが本書で述べていることの全てを絶対的な事実だと受け取ることに注意を促しているが，全体としては，最も深い意味では，詩的な心理的な意味では，これは真実なのだ。特に，人物攻撃は，面白がると共に用心して読まねばならぬ」。（ナイダー，N版序文）

最も深い意味，詩的な心理的な意味で真実なら，自伝にとってこれ以上の真実はないだろう。なお，些細なことや，細部については，ペインにマーク・トゥエインが言った（1906年1月10日に）という言葉，「些細なことを省き，大きなことだけを数え立てるような自伝は，その人の生涯の適切な像では全くない」を踏まえながら，グリッベンがやはり秀れた見解を表明している。[11] こういう些細な出来事は，Henry Adams がかつて（Henry James 宛て書翰，1908年5月6日付き）言った「墓の中での防護盾」"shield of protection in the grave"，「伝記作者たちにそれらを盗られないようにするために，自分で自分の生活を守る方法」になるものだと。自伝の細部は，財産の一形体だという考えは，マーク・トゥエインに一貫していたこともグリッベンは指摘している。[12] マーク・トゥエインの最初の単行本伝記（*Mark Twain : His Life & Work*, 1892）作者である Will M. Clemens が *The Mark Twain Story Book* なる著書を出版する許可を求めてきた時，トゥエインはそれを次のように言って激しく断った（1900年6月6日）ことを紹介しながら。

「一人の人間の歴史は，その人自身の財産である。墓がその中でその人の所有権を消滅させるまでは。」"A man's history is his own property until the grave extinguishes his ownership in it."

墓がマーク・トゥエインの所有権を消滅させた今日，彼の＜歴史＞は人類の財産となったわけだが，彼の＜歴史＞である「自伝」は「どう編集し組織化しても，秀れた本（仮りに本と呼べるにしても）ではない」と，言い切るエマソンのような人もいる。そのエマソンは言う。マーク・トゥエインは記憶を，*Tom Sawyer* や，*Huck* や，"Old Times on the Mississippi" でもっと遙かに美事に使った。そこでは記憶が追憶の情を濾過されて形を変え，芸術によって洗練されたからだ，と。[13]

30年以上も抱え込んでいながら，「自伝」を最晩年になって口述筆記という形で仕上げに近づけなければならなかったというのも，記憶を次々に小説作品に吸収され続けたからかも知れない。口述は，記憶を喚び戻す手段でもあったろう。マーク・トゥエインは言う。「語りを書く」というのは常に人をがっかりさせるものだ。興味の精髄が在る個人的な関係の，自然な流れを無くすのだ。口述の速記によってこそ，自分自身の食卓——常に最も霊感の湧く場所——にいるかのように語れるのだ（MTB, Ⅲ. 1268)。これを踏まえてエマソンは言う。記憶の口述は，話し手にとって興味が深かったのだ。自然発生の性格には充ちていたが，その結果は必ずしも読者にとって興味深いものではなかったのだ。その上，文学的な個人的な生活の大きな相は無視された。マーク・トゥエインは自伝を，自らの人生の記録を提供するためにではなく，いつも主として自分自身の楽しみのために使った。そして作家としての生涯を，自分とその子供共々の利益として使ったのだ。また，弟の Henry や自分の息子 Langdon の死に感じていた罪を自分自身から除去するための治療としても自伝を使ったのだ。宗教に関する例の問題も，口述し終るとほっとして気分が楽になったと手紙に書いているではないかと。(14)

長年，楽しみながら苦しんだトゥエインの自伝制作の事情は，他にも首肯されそうな解釈をまだ生み出すだろうか。

マーク・トゥエインは，口述を自伝制作の最上の方法とばかり思っていたわけではない。いや，最後にはやはりこれも欠陥手法だと思うに到ったようだ。死のほぼ一年前，彼はハウエルズにこう書いた（MTHL, 1909年4月17日 No. 664)。

自伝を口述するには，取り除けようのない程の欠点がある。(1) 速記者は講演の聴き手というわけだから，常にその人を意識することになるが，聴き手が一人というわけだからどうしても抑制として働く。異質の聴き手が一人というのでは霊感がめったに働かぬ。聴衆が多ければ，彼らからこちらの話す貴重な内容を供給してもらえることになる。その魂と精神を。だからこちらは言葉を出すだけですむ。

(2) 己れ自身に語りかけたり声を出して考えたりするのはまごつかず自由に話すのに必要な過程だが，石に化した聴き手が常に前にいては不可能だ。

(3) もしその速記者が婦人だと，毎日言いたいことは山とあっても言えない。女性の前で言うには不適切なことだから。

(4) もしその人が宗教心の篤い人だと，日に何度も顎が固くなる。

(5) しばしば非常に個人的なことが言いたくなるが，それは余程の親友でないと言えない。以上五点の理由を挙げて，従って口述に替る良い方法として，「手紙を書いてしかもそれを送らないこと」というのを思い付いたという。「手紙を書いてしかも出さないという手法」だと，上記のいずれの困難も克服できる方法だ，不敬なことを言いたくなったら Rogers[15] に，品のよくないことは Howells に，神学上のことは Twitchell に宛てて，投函しない手紙を書けばいいわけだ。ようやく私は自由人になった(I am a free man at last!)と。最後の最後まで「自由」を求めてやまないとは，正に Huck 少年そのままであるが，口述筆記も，自然な魂の発露を求め続ける過程での一方法だった，ということになろう。

手紙は真実を語る（必ずしも常にではないにしろ）ための一手段でもあったろう。ハウエルズが William B. Scoones に宛てた手紙（1883年6月30日付）が思い出される。彼はこう書いている。「手紙は短い自伝です。おそらく長い自伝よりもっと多くの真実を含んでいるでしょう」と。トゥエインのハウエルズ宛ての書翰は，トゥエイン自らが筆記者になって実施した口述自伝の趣きがある。現にハウエルズはトゥエインに，使い終ったら返せと言っている（1906年5月18日付，No. 628）ので，トゥエインがハウエルズに宛てた自らの手紙を，口述自伝のために使ったことが判る。

*

マーク・トゥエインの『自伝』は，発生の段階から単独の作業ではなかった。独りでは出来なかった。口述筆記という共同制作者を必要とした。1907年3月 Bermuda で休暇を過ごしながら，彼は述懐した。死ぬまで仕上りはしないが，資料を集成しようと思っていたことは成し遂げた。既に「自伝」を4～50万語は口述し終えたから，私が明日死んでもこれだけでも，私が心に「自伝」として思い描いていたものの材料にはもう十分だろうと（N版，序文）。そして，彼の「自伝」が『自伝』として世に出るには，その死の14年後，再にその16年後，そのまた19年後にと今まで計3人の共作者を必要とした。彼の最後の作品である『自伝』が，徹頭徹尾共著であるというのは，甚だ示唆に富んではいないだろうか。彼の最初の小説『金ぴか時代』*The Gilded Age*(1873)は，何と，Charles Dudley Warner との共作であった。Bret Harte とも戯曲『アー・シン』*Ah, Sin*（公刊は1961）を共作した。実現には至らなかったが，ハウエルズと小説を共作しようと何度か思い合ったこともある。小説の

共作はならなかったが，ハウエルズとは，後の研究者たちの「共同」作業によって実現した美事な往復書翰集（マーク・トゥエイン350通，ハウエルズ331通計681通）という「共著」を作った。出世作の短篇「キャラヴェラス郡の有名な飛び蛙」"The Celebrated Jamping Frog of Calaveras County" も，聞き出した話が元でいわば<共作>である。そういえば，*Tom Sawyer* も *Huck* も，*Life on the Mississippi* も，皆<共著>だとも言える。過去の彼自身との。ハンニバル時代の，あるいはミシシッピー河蒸気船の水先案内人のサム少年との<共著>である。マーク・トゥエインの書いたものの主要な源泉が見い出せそうなのは，「自伝」の中に記録された追憶の世界だ，という美事な指摘もある。(16) <共作>という精神が，マーク・トゥエインの本質だったのである。彼の名講演も，多くの聴衆との<共作>だったことが，計らずも先刻触れたハウエルズ宛ての書翰（No. 664）で露わになっていた。

「自伝」の語りの特徴は，時間が前後自由に交錯することであったが，これも，「マーク・トゥエインの旅行記，小説，短篇，粗描，随筆，演説，いずれも時間の順序が前後に入り組んでいる」(17)ことを思えば，彼の一大特徴なのである。「自伝」は彼の文学の特質・本質を象徴しているのである。そして，勿論彼の人間そのものを。内容と共に，その制作過程が，マーク・トゥエインという作家と人間を象徴しているのが，彼の「自伝」であった。自分で自分の生涯を叙するということ自体が難業である。その上，マーク・トゥエインは，作家であった。W. H. Auden は主張している。作家の伝記と自叙伝は「常に有り余ったものとなり，趣味の悪いのが普通だ」"Always superfluous and usually in bad taste"(18) と。その<作家の自叙伝>なのである。苦業でも当然であったが，それにしても難業であった。これでもう何の骨も折れず気易い仕事になった，などと本人が語ってもである。その公刊の事情，現在の少なくとも三種の異本の存在を見ればそう言えよう。本稿も専ら殆ど，その有様を見てきたのである。

マーク・トゥエインが早くから自伝の執筆などを思い立ったのは，時代の変化の急激さを敏感に感じ取ったからであろう。弱年の時に親しんだミシシッピー河とその周辺，西部の辺境が，どんどん空間の点でも変化が急だったのである。現在及び未来の自分を突き止め，空間の変化を伴う時代の激しい移り変りの中で自らの正体を見定める，いわゆるアイデンティティ把捉のために，年少時の自己確認が必要だった。余りにも<古き良き時代>を経験したのである。「自伝」を書き悩んでいるうちに，「自伝」を物しても不思議でない年齢に達

していったのである。

自伝を物する精神は，所詮，自己愛だろうと冒頭で述べた。秀れた自伝制作には，真の自己愛が必要であることを，マーク・トゥエインは知悉していたのである。自己惑溺であるナルシシズムではなしに。だが，身近かに不幸を重ねるようになったせいもあろうが彼は世を厭い人間を嫌う暗い世界観人間観を持つようになっていったに違いない。汎愛・博愛から遠い心である。こういう精神が自己へ向ける愛こそ，真の自己愛ではなく，ナルシシズムになるのである。彼の希う特異な，従来例のない，将来の模範となる，そして自分の他のどの作品よりも永続する価値のある『自伝』には，真の自己愛でなくてはかなわない。従来の，かつての彼の，汎愛・博愛に繋がる真の自己愛が必要である。それの奪還を目ざしながらのナルシシズムとの闘いの過程・軌跡が，彼の「自伝」であり，そのことを示すのが，彼の三種の『自伝』だったのである。

伝記とは，一人の人間の＜抜粋＞である。一人の生涯からの＜引用＞の集成である。「引用は特に興味深いものです。というのも，人は，誰が書いたものにしろ，自分自身の言葉でないものを引用したりはしないからです。その＜誰にしろ誰か＞は，別の時代の別の状況下で別人の姿をとった引用者その人なのです」とは，Wallace Stevens の言葉であるが，(19) 自伝は，そういう引用を自分自身について自分で行うことに他ならない。当然，何を引用すべきか，探さなければならない。

思えばマーク・トウエインは，最初から，＜探す＞ことを職業にした。印刷工として活字を，水先案内人として水路を，試掘者として金銀鉱を，新聞記者として記事を，講演者として聴衆の反応を，探してきた。作家は無論，書くべき内容とその表現を探す職業である。最後に，自己確認の作業であり自己劇化である，自分自身を探す営為，「自伝」の制作に従事したのである。ナルシシズムとの闘いは必至であった。

註

（1）Northrop Frye, Sheridan Baker & George Perkins, eds., *The Harper Handbook to Literature* (New York : Harper & Row, 1985) p. 55.

（2）我々日本人には，もう一種類，マーク・トゥエインの自伝がある。『マーク・トゥエイン自伝』渡辺利雄訳（研究社，1975）で，これは，訳者が，チャールズ・ナイダー編の自伝を約三分の二に縮めて訳出編集した名作。

（3）Everett Emerson, *The Authentic Mark Twain : A Literary Biography of Samuel L. Clemens* (Philadelphia : University of Pennsylvania, 1985)

p. 262.

(4) Ibid., p. 263.

(5) Henry Nash Smith & William M. Gibson, eds., *Mark Twain-Howells Letters* : The Correspondence of Samuel L. Clemens and William D. Howells 1872-1910 (Cambridge : The Harvard Universify Press, 1960) pp. 810-811, pp. 814-815. それぞれ No. 634, No. 636 の手紙。以下, MTHL と略記。

(6) Albert Bigelow Paine, *Mark Twain : A Biography*. 4 vols. (New York : Harper & Brothers, 1912.) 以下, MTB と略記。

(7) Emerson, p. 264.

(8) Ibid., p. 264.

(9) Alan Gribben, "Autobiography as Property" in *The Mythologizing of Mark Twain*, eds. Sara de Saussure Davis & Philip D. Beidler (Alabama : The University of Alabama Press, 1984), pp. 52-53.

(10) マーク・トゥエインの魂は，倫理的な意図に関する限り，真実という生地から作られていたが，記憶がしばしば彼を裏切ったのだ。正確であろうと最も務めた時にさえ，自分でもそれには気付いていて，一度など悲し気に言ったものだ。「若い頃は何でも思い出せたものだ。起ったことも起らなかったことも。しかし年を取つてきたので，間もなく，起らなかったことばかり思い出すようになろう」P版の序文。

(11) Gribben, p. 52.

(12) Ibid., p. 47.

(13) Emerson, p. 265.

(14) Ibid., p. 265.

(15) Henry H. Rogers (1840-1909) は，スタンダード石油社の重役で，マーク・トゥエインが破産した時，助けてくれた恩人で親友。Joseph H. Twichell (1838-1918) は，隣人で牧師で親友，マーク・トゥエインの結婚式 (39年前) も葬儀 (1年後) もとりしきってくれた。

(16) E. Hudson Long and J. R. LeMaster, *The New Mark Twain Handbook*. (New York & London : Garland Publishing Inc. 1985.) p. 151.

(17) Gribben, p. 49.

(18) Milton J. Bates, ed., *Wallace Stevens' Commonplace Book : AFacsimile and Transcription*. (Stanford : Stanford University Press, 1989.) p. 1.

(19) Ibid., p. 1.

本稿の一部は，日本英文学会第62回大会 (1990年5月20日，於 岡山大学)の Symposia 第6部門「1890年の危機——自伝とアメリカ作家たち」で口頭発表された。